浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

第349号
平成24年11月

電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

【語意】喜衰楽老（衰えるを喜び老いを楽しむ）
衰えは成長の一過程、むしろ、そこに喜びを見いだし、老いを楽しもう。

白山スーパー林道　撮影：超空正道

かつて
九九が言えた
逆上がりができた
あの時の感動と喜び
憶えていますか

しかし今は
ただ衰えるばかりと
嘆くなかれ

人生
終着駅に着くまでは
日々成長の一過程

お浄土行の
切符を握りしめ

車窓に現れる
これまで
見たこともない
さまざまな風景を
感動をもって
楽しんでいこう

喜衰楽老（きすいらくろう）

まだ残暑厳しい、今年の秋のお彼岸が終わって間もない頃の夕方のことでした。近くのクリニックへ、血圧の薬をいただきに、待合で雑誌を読んでいましたところ、八十を超えていると思われる老女と、多分その娘さんでしょう、二人が慌(あわ)ただしく入ってきました。聞くとはなしに耳に入ってきた会話は、だいたいこんな内容でありました。

「急患だといってあるのに、こんなところに待たせて、直ぐに看てもらえないのかね。」

「いつ死んでもいいようなことを言ってる人が、そう慌(あわ)てなくともいいの。それに、今見てる限り、元気そうで、病人とは思えないよ。」

「おまえは、そんな皮肉を言って、年寄りの気持ちが解からんのかね。」

そのうち、看護師さんが見えて、どんな状況であったか聞いたところによると、足が冷えるので、こたつの中に潜(もぐ)っていたら、気分が悪くなり、体温を測ったら、三十八度もあったから、こちらに飛んできたというのです。

「じゃあ」といって、看護師さんが持ってきた体温計で測ったところ、三十六度五分でした。

「そんなことはない。うちでは、三十八度あった。絶対おかしい。これ壊れているんじゃないのかね。」

「あのね、今日は日中の気温が三十度くらいあったでしょ。それで、こたつに入っていれば、気分が悪くなるし、体温も上がるの。」

そんなやりとりの後、胸のX線撮影をするということで、二人は、待合を離れて行かれました。

さて、この会話を若い第三者の方が聞いたら、まるで漫才のようだと思うかもしれません。しかし、当の本人にしてみたら、死の不安と恐怖で、ただ事ではないのであります。これに似たようなやりとりは、お年寄りと一緒に生活している方であれば、必ずといっていいほど体験するものであります。

『**人間だもん**』で有名な**相田(あいだ)みつを**氏を通じての逸話ですが、師事していた武井哲応老師から、次のような話を聞いたというのです。

「寺に、『ぽっくり逝(い)きたい』『ころっと死にたい』という婆さん爺さんがよく来るんだな。あんまり言うんでな、『ここに、直ぐ死ねるように、しっかり祈祷しておいた薬があるでな、そら持ってけ』といってやるんだが、それが、だれも持っていこうとせんのだな。」

やはり、これが人間ですよね。

年を重ねれば、当然体の具合も悪くなり、生きていることが辛くなり、愚痴が多くなり、周囲から疎まれもします。かといって、この世には未練が、まだまだたっぷりあって、そう簡単に死が来てもらっては困るというのが、偽らざる本心なのであります。この矛盾を、どう折り合いつけるか、そこが問題なのであります。それで、これを、自分と他人とに分けて考えてみることにしましょう。

他人の場合、皆さんも経験したことがおありでしょう。「なんでこんな馬鹿なことを」と思うことをするのは、子供と老人です。そのときには、ぐっと堪えて、「**子供叱るな来た道じゃ。年寄り笑うな、行く道じゃ**」これです。これしかありません。

では、自分の場合はどうしたらよいか。仏教で大事なことは、他人事ではなく、自分のこととして考えることです。常日頃から、老人をよく観察をし、自分にとっての理想的老人像を、老人になる前に作り上げておくことが大事です。そして、その必須条件は、「**愚図らない**」「**愚痴をいわない**」ということです。「寝たきりになったらどうしよう」「認知症になったらどうしよう」あれこれ老後の不安は尽きませんが、それには、蓮を見習うがよろしいかと思います。

蓮は、どっぷり塵芥の混ざった泥に浸かって、そこに根を張り、それを肥やしとして花を咲かせます。しかも、隣の蓮池の方が良さそうに見えても、自ら移り動くことはありません。今あるところで、精一杯に自分色の花を咲かせます。

美しく老いたいという思いはありましょうが、本来、老いは美しさと縁遠いものです。また、「水清ければ魚住まず」と諺にもあるように、物事、清く美しいことが理想の条件や環境であるとはいえません。むしろ、視界を悪くしている泥こそ、花を美しく咲かせる養分と心得、花を咲き終え、しっかりと結実するまで、愚痴はいわないことです。

そして、ものは思いようで、われわれ若い頃は、成長を喜びとしたわけで、ならば衰えも、成長の延長線上にあると考えれば、希望に満ちたものとなります。特に精神面では、年を重ねれば重ねるほど、これまで見えていなかった世界が見えてくるもので、阿弥陀様からお浄土行の切符をいただき、列車の窓から見えるさまざまな風景を楽しんでいこうではありませんか。

◎冗談（じょうだん）を言う

現代の若者に、この語の意味を問うと、案外と「ギャグを言うこと！」なんて答えが返ってきそうである。もっぱらふざけた行動や話の意味で用いられているが、本来「冗」は、暇（ひま）とか無駄という意味を持っていた。つまりは暇つぶしの話であり、無駄話のことであり、必ずしも笑いを伴うと限ったものではなかったのである。

ところで仏教ではこの語は、どんな意味をもっているのだろう。この場合はもっぱら仏道修行に関係のない、役に立たない話が冗談とされていた。

何やらお釈迦様は、冗談一つ言わない真面目人間にしか思えなくなりそうだが、話術は一流だったのだから、きっと役に立つ笑い話ぐらいは、していたことであろう。それがなければ、仏教がこんなに広まるわけがない。

（『仏教のことば』ひろさちや監修）

今月の一言

よい人にあって
学び
悪い人にあって
省（かえ）みる

雑記

▼収穫

マテバシイの実

菜園の楽しみは、やはり収穫にあります。ところが、初心者は、期待が大きいだけに、落胆も大ききのであります。

期待した里芋は、焦るが故に、早くに掘り起こしてしまい、小さな芋しかとれませんでした。でも、とても柔らかく、美味しかったので、自分で自分を慰めております。

薩摩芋は、まだ収穫していませんが、多分、失敗であります。蔓ばかりで、肝心の芋ができていないようなのです。どうも、肥料のやり過ぎか、「配合が悪かったようであります。誰に聞いても、「薩摩芋は簡単に育つ」なんていうものだから、よけいに、落ち込んでしまいます。

今年、何とかうまく育ったのは、トマトとバジルだけでありました。野菜作りもなかなか奥が深いということを実感させていただきました。

▼牛巻（うしまき）

知人から、瑞穂区の郷土史の本をいただきました。面白い記述がありました。**牛巻**の地名は、往古そこには淵（ふち）があり、**牛**や馬を**巻**き込むほどの巨蟒（こもう）（大蛇）がいて、天正14年（1586）、熱田の社職が弓矢で退治し、蛇塚ができたことに由来するとか。

◆スモックのポッケいっぱいマテバシイ　沐魚